

雑感 286-2004.12.24 「環境省のシンポジウムを終わって - リスクコミュニケーションにおける研究者の役割と責任 - 」

影響の大きさをできるだけ正確に伝えるのがまず第 1 に必要

(以下のやりとりは中西の記憶に頼っているので、間違いがあるかもしれない)

環境省主催「第 7 回 内分泌攪乱物質問題に関する国際シンポジウム」(12 月 15 ~ 17 日、於：名古屋) の、第 6 セッション「リスクコミュニケーション」の座長という役を終わった。もっと、もめるかと思っていたが、特にもめるということもなかった。

私が、ここで強調したことは、環境ホルモン問題のリスクコミュニケーションの功罪をきちんと整理すべき時に来ていること、環境省は是非、このことを 1 年以内にやって欲しいこと、第 2 に、リスクコミュニケーションにおける研究者 (学者) のスタンスや責任をきちんと考えようということである。

しばしば、マスコミの責任が言われるし、当日、日垣隆さんは、もっぱらその話をしていたが、学者 (?) の関係しない報道は無いわけだから、また、常に、最初の情報は学者から出ているので、学者は最も責任のある立場にあるとも言える。それを自覚して欲しいし、わが国の環境ホルモン騒動でも学者の責任は大きい。

また、リスクコミュニケーションの議論では、学者は第三者みたいな立場で、研究し発表しているが、それが納得できない。自分で、危険を冒してリスク情報を出すべきではないか。自己の責任としてのリスクコミュニケーションについて、研究するという立場であってほしい。

環境ホルモンのような失敗を繰り返さないためには、環境学者は「危ない」と言うときに、その危なさは、大体どんな大きさなのか、その影響はいつ頃出てくると考えているかについて、まず、説明すべきだと思う。大まかでいいが、影響の大きさを推し量りながら研究すべきで、こういう推測をする方法の科学は、研究者にとっては、共通基礎科目みたいなものである。私は、冒頭このような問題提起をした。

誰が、影響の大きさを判断すべきか？

これに対して、パネリストの中からも異論が出た。吉川肇子さん (慶応大学) からは、それは定量的な数値として出せということか、という疑問が出された。

山形浩生さん (評論家・翻訳家) は、何らかの評価を出すことは必要だが、それは、研究者本人では無理かもしれない、むしろ、経済学者などが判断するのでもいいではない

かという意見を出した（例示あり）。数量で出すのか？という吉川さんの疑問に対し、山形さんは、結局最後は数字になっていると答えた。

フロアからも、そんなこと研究者が出来る筈がないという意見が幾人かから出された。これに対する私の考えはこうである（一部加える）。

吉川さんの質問については、山形さんの答えと同じで、最後は緊急度や重大さに応じて、研究費を配分し、または、施策にしていかなければならないので、最後は数字になる。評価は定性的なものしか不可能と言っても、予算配分は数字になるのだから、その時点で定量的な重み付けが行われている。

研究者がその影響の大きさを分からないのであれば、研究者以外の方が重み付けをすることになるのだが、それでいいのだろうか？最後は議会とか他の専門家も入った委員会で決めるとしても、最初は、自分で重みを主張すべきではなかろうか？本当に、研究者の意見も聞かず、第三者機関だけが判断するだけでいいのか、そこを考えるべきである。

もし、研究者自身が、どのくらい重要かの判断ができないのであれば、研究者がTVに出て"重大な問題です"ということは言うべきでない。新聞記者にも言うなと言いたい。自分は分からないのだから。

環境ホルモン問題では、企業も被害者と言っていい場面があった。その責任はとらなくていいのか？

一番明瞭なのは、カップラーメンのカップから環境ホルモンの一種スチレンダイマーとスチレントリマー（両者をスチレンと略す）が溶出するという問題であった。

この物質は、SPEED'98のリストに取りあげられ、そして、溶出するという報道で（この元は、横浜国大における中西の研究室に在籍していた助手による実験結果だが、本人は、そういう実験ではないと言っている）、不買運動まで起き、15%も売り上げが落ちたという。多分、小さな企業ならつぶれていたであろう。最終的には、溶出もせず、ホルモン様活性もなく、SPEED'98のリストから外された。

水俣病のような事件で、企業の責任や国の責任を追及するのは当然である。それと同じように、スチレンの場合は、このリストを作ることに荷担した学者や行政、不買運動を呼びかけた市民運動などは、責任を感じて当然だろう。

金銭補償をするかどうかは別として、少なくとも悪かったと言う、なぜそうなったかを説明する、二度と同じ過ちを繰り返さないようにするにはどうすべきが考えるくらいは、当然だろう。なぜ、そう考えないのだろうか？

企業も被害者になる、被害者は国民で、加害者は企業というような固定した関係ではないと言ったら、会場の複数の女性達から、奇妙な声が発せられた。どうして自分たちも間違ふことがある、そして、迷惑かけたと考えられないのだろうか？

加害者と被害者の関係は、固定的なものではないということは、山形さんも述べていた。

如何に間違った情報が流されたか？

男性の精子数が、この50年間に半減しているというスキャケベク教授の報告は、大きな衝撃を与えたが、今ではこの論文のような結論は導き出せないことは、多くの人々が認めている。このことについては、日垣さんが大変丁寧な説明を行った。また、マダイの雌化みたいな報道についても触れ、環境ホルモン問題でNHKが果たした役割（負の役割）が大きかったことを述べた。

これについて、会場から「私たちの周囲には、子どもに異常があつて、苦しんでいる人が多い、みんな心配している、それなのにxxx」という意見が出された。xxxのところの言葉を、はっきりとは聞き取れなかったのだが、どうも、環境ホルモンの影響がないというのが、というような意味だった様である。

私などは、こういう質問を聞くと、何を言っているのだろう、それが、環境ホルモンの影響でない可能性の方が大きいのに、と思うのだが、実は、質問者のような発想をする人が意外と多い。

私が、ダイオキシンのリスクは小さい、気長に少なくするしかないし、それで十分だと言うと、「これほどキレる子がいるのにほっとくのですか？」とか、「最近障害を持って生まれてくる子が多いのをどう思うのですか？」と聞かれる。

確か、日垣さんも言っていたが、もしキレるのがダイオキシンのせいなら、ダイオキシンはどんどん減っているのもう安心といえる。また、障害をもった子どもが多くなっているという結果もない。なによりも、原因を決めつけることくらい対策から遠い行為は無いのだが、どうして、こう決めつけるのだろうか？

最初の情報発信に気をつけよう

環境ホルモン問題では、最初に出された情報が皆の頭の中に染みつくと、そこから抜け出すことが如何に難しいかを教えてくれる。そして、この最初の情報は、学者が出し、学者が増幅していることに注意を喚起したい。

今後は、ここに気をつけよう。

パネリストの一人として参加していた、京都大学工学系研究科教授の松井三郎さんが、新聞記事のスライドを見せて、「つぎはナノです」と言ったのには驚いた。要するに環境ホルモンは終わった、今度はナノ粒子の有害性を問題にしようという意味である。

スライドに出た記事が、何新聞の記事かは分からなかったし、見出しも、よく分からなかった（私の後ろにスクリーンがあり）ナノ粒子の有害性のような記事だったが、詳しくは分からなかった（読みとれなかった）。

そのとき、私は最近外国で問題になっている、オーバードルスターの論文の記事かと思った。それは、ナノ粒子を含む水中にオオクチバスを入れると、48時間で脳の一部と考えられている臭球に移行し、脳の脂質に酸化ストレスを与え、障害を引き起こす可能性あり、また、このメカニズムはほ乳類にもあり、という論文が今年の3月に出て、問題になっている。

私は、たまたま二日ほど前に、その論文を読んだ。そして、注目すべきだが実験条件は整備されていないし、問題が多い論文だなと評価した。

その論文だと思ったのだが、帰宅して新聞記事検索をかけると、New York Times などには出てくるが、日本の一般紙には出ていない。したがって、別の論文の紹介のようである。その内容がどういうものかは分からないのだが、いずれにしろ、こういう研究結果を伝える時に、この原論文の問題点に触れてほしい。

学者が、他の人に伝える時、新聞の記事そのままではおかしい。新聞にこう書いてあるが、自分はこう思うとか、新聞の通りだと思うとか、そういう情報発信こそすべきではないか。情報の第一報は大きな影響を与える、専門家や学者は、その際、新聞やTVの記事ではなく、自分で読んで伝えてほしい。でなければ、専門家でない。

もう一つ気になることがある。それは、様々な大学が開いている市民講座、社会人講座などでの講義の内容である。

講義の内容を時々目にするが、かなりの講師がその原論文を読んでいないことが分かる。つまり、新聞に出たり、××本に出たものを、そのまま持ってきて教材にしている。これは、どうみても専門家の責任を放棄しているといえようがない。

学者は、その論文の内容を、教材に使う、講演の素材に使う、新聞やTVで使う、そういう時に、必ず論文を読むべきだ。非専門家に話す時には、必ずそうしてほしい。それが、専門家として期待されていることだから。

その一步を踏み間違えないこと、それがリスクコミュニケーションで最も重要なことだと私は考える。

やや話題がずれるが、ナノテクについてのシンポジウムがあるのでお知らせする。私も、少し話す。